

一面よりつづく
バクロし、「基地と買春観光」とCTSコンビナートの島に化し、沖縄人民を日本帝の侵略反革命の尖兵にしてあげんとする攻撃への戦闘体制を強化せねばならない。

同時に、沖縄人民だけにこの闘いを押しつけ、沖縄人民の单一の闘争としての前進に敵対する反動分立主義の「本土」を貫くプロレタリア人民の単一の闘争としての前進に敵対する反動分立主義の「本土」を貫くプロレタリアの軍

門に下らんとしている小ブル急進主義中核派をはつきりと批判し、この闘いの中

で、沖縄解放をめざす沖縄ブルレタリアーの「本土」の沖解同建設を促進してこのようないまや沖縄闘争論の軍

に悲惨の一切と闘う事を強度として頑われてゐる。即ち、沖解同建設を沖縄「本土」ブルレタリアーの

革命的団結を形成する不可欠の条件として把えず、沖縄「本土」を貫く单一の沖解同建設を促進するのでなく、沖縄ブルレタリアーを軸とした沖縄人民の團結をめざす組織として沖解同建設を促進するのでなく、あるいは政治的決起を貢いて爆発させていくこう

の革命的団結をめざす組織として沖解同建設を促進するのでなく、あるいは政治的決起を貢いて爆発させていくこう

の革命的団結をめざす組織として沖解同建設を促進するのでなく、あるいは政治的決起を貢いて爆発させていくこう

の革命的団結をめざす組織として沖解同建設を促進するのでなく、あるいは政治的決起を貢いて爆発させていくこう

の革命的団結をめざす組織として沖解同建設を促進するのでなく、あるいは政治的決起を貢いて爆発させていくこう

一切の日和見主義の台頭を許さず沖縄解放の革命的発展を

「返還」の集大成として行わるようとしているのが、今七月二〇日からの海洋博であり、それへの臨席を口実とした戦犯天皇ヒロヒト・皇太子アキヒトの沖縄上陸に他ならない。日帝はこれをもって、天皇の名のもとに沖縄人民を侵略戦に動員し、沖縄戦を頂点に大量虐殺した歴史をおおいにかくし、米軍までが海洋博に参加するという全く沖縄人民を愚弄しきった事実には

七〇年安保一七二年沖縄つきりしているではないか五月末日の原水協(仲吉理事長)による「皇太子来の闘いを、沖縄」「本土」海洋博粉碎、買春觀光糾弾沖反対、海洋博糾弾の闘いを、沖縄「本土」争取り組み宣言をはじめとして、各職場から皇太子・天皇来沖、海洋博等に対する熱気を持った討論と闘いがわきおこつており、すでに高教組北支部、国公労、評中央、原水禁中央や、「アジア人民、とりわけ南

県労協」指導部内右派などは、この闘いをさまざまに口実をもうけて庄殺せんとしており、「二・四ゼネスト」として闘いを現れることに油断してはならない。

一切の弾圧を粉砕して闘

は、この闘いをさまざまな形で示されており、沖縄人民の闘いと連帶し、見主義である。

その小ブル的立場は、日本帝・社帝の「本土」ブルレタリアーへの排外主義

社会排外主義攻撃の苛烈さ

の前に敗北するに違いない

というブルレタリアー不

務を一国主義に低める日和見主義である。

して表現しており、「本土

長しつつ再度侵略反革命戦に動員していくとしているの。何よりもそれは、六月二八日の新聞でも明らかのように、自衛隊のみならず、米軍までが海洋博に参加するという全く沖縄人民を愚弄しきった事実には

民を愚弄しきった事実には

一七日午前九時五〇分羽田発日航機
一七日午後零時二〇分那覇空港着、同四〇分南部戦跡摩文仁へ。午後六時一〇分、市内沖縄ハーバービューホテル着。

一八日午前九時一四分、那覇新港から海上保安庁の巡視船「みうら」で海洋博会場へ。午後零時一〇分、渡久地新港着。車で会場内の迎賓館入り。午後四時、「沖縄愛樂園」着。同六時五分、本部町の宿舎ロイヤル・ビューホテル入り。



皇太子沖縄上陸日程

マレクス主義

政治理論機関誌創刊号

- プロレタリア独裁と女性解放(序説)
—— 党の綱領的基礎と女性解放 ——
- 共産同全国委と党綱領問題
—— 党綱領確立へむけて(序) ——
- 総括への序説

●組織論確立の為に(I)

- 北原イズム=純正サークル主義を粉碎せよ
- 5・5第9回T糾弾会と我々の進むべき道
- 声明……共産同全国委(ボルシェビキ)
- 声明……女性解放委

全ゆる日和見主義を沖縄戦線から放逐せよ

摩文仁糾弾闘争を 断固支持せよ

五・一五「返還」以降、日帝権力の沖縄政策が、文字通り沖縄を「基地とCTSコントロール」と買春觀光の島へと全社会的に再編し、沖縄人民をもつとも奇酷な運命へと陥し込めてきたのであり、その日帝ブルジョア権力の攻撃の結節点に外ならない、だから、海洋博開催に向けた攻撃が、インドシナ民族解放革命戦争の勝利のこの時期に重なつたのは決して偶然ではない。沖縄海洋博は、ニクソン・ドクトリンによる共同声明に基づく五一日米共同声明に基づく五・一五沖縄「返還」に託し、この絶望的な支配体制の再編の試みは、より一層、世界革命の勝利に向けて革完成するためのものであつて、これは、沖縄を米日韓の反革命体制の最重要拠点（ストロング・ポイント）と命体制の一翼を荷うことを打ち固め、同時に日帝もつて、独自利害を追求せず、そのアジャ侵略反革命へ向けて、これが、沖縄人民を排外主義へと動員せんとするものに外ならぬい。

だが、歴史は弁証法的である。ベトナム人民の不屈主主義への屈服、社会排斥の前進の前に戦後世界体制外主義への転化を左足の支

六・一八摩文仁糾弾闘争を断固として支持しなければならない。「マブニ・スプレー事件」として、「沖縄タイムス」を初めてとするマスコミが、悪質なイタズラとして葬り去ろうとしたにも拘らず、この糾弾闘争を支持するか否かに、単に政治的のみならず、新左翼運動二十年の総括が、従つて思想的な分岐がかかるているのである。

イデオロギーを根絶せよ 加納英二

に賛成するといつた屋良防衛する社共の排外主義者どもは、もはや「革新」「改良」におきかえ、「階級闘争」を階級的屈服において示してきたのである。

極右反動西一派

を放逐せよ

五・一五沖縄「返還」は、この絶望的な支配体制の再編の試みは、より一層、世界革命の勝利に向けて革

命体制の再編の試みは、より一層、世界革命の勝利に向けて革

極右反動西一派

を放逐せよ

五・一五沖縄「返還」は、この絶望的な支配体制の再編の試みは、より一層、世界革命の勝利に向けて革

命体制の再編の試みは、より一層、世界革命の勝利に向けて革

極右反動西一派

を放逐せよ

五・一五沖縄「返還」は、この絶望的な支配体制の再編の試みは、より一層、世界革命の勝利に向けて革

命体制の再編の試みは、より一層、世界革命の勝利に向けて革

極右反動西一派

を放逐せよ

五・一五沖縄「返還」は、この絶望的な支配体制の再編の試みは、より一層、世界革命の勝利に向けて革

命体制の再編の試みは、より一層、世界革命の勝利に向けて革

極右反動西一派

を放逐せよ

五・一五沖縄「返還」は、この絶望的な支配体制の再編の試みは、より一層、世界革命の勝利に向けて革

命体制の再編の試みは、より一層、世界革命の勝利に向けて革

極右反動西一派

を放逐せよ

沖縄女性の決起に連帯し

買春観光糾弾の戦列を

向井祐美

五・一五・一六・二三に示された沖縄解放闘争の昂揚は、沖縄の全社会的再編を強行しつつ、沖縄のアジャへ向けての侵略反革命前線基地としての更なる強化を策謀する日帝の攻撃に真正面から対決し、「本土」プロレタリアートの連帶を打ち固めつゝ闘い抜かれた。七・一七・一〇海洋博粉碎／皇太子週刊誌・テレビでは海洋博ラッシュである。そしてこの闘いの中で、日帝の沖縄女性に対する更なる差別攻撃に抗して、買春観光糾弾を掲げた沖縄の女性の力強い決起が立ちとられ、沖縄解放闘争の質的飛躍の強力な一翼を形成せんとしている。

開催間近にせまつた沖縄海洋博の宣伝「観客」動員策動が、「本土」では声高に呼ばれている。中でも週刊誌・テレビでは海洋博ラッシュである。それらのほとんどが、海洋博買春と結びつけ、沖縄の女性への悪質な差別を煽つてこっていることを、我々は怒りをもつて糾弾せねばならない。

「夜の海洋博を迎えて討つ」春記事では、「沖縄の女性はセックスに関する話題」とい、六月P.M.では「沖縄に買春に行こう」と言い放っているのである。

我々は、このようなブルジョア・マスコミによる女性差別が、他ならぬ日帝の沖縄人民への差別分断攻撃七二年五・一五沖縄返還」は、インドシナ民族解放闘争の勝利的前進によって戦後ヤルタ・ジユネーブ体制の崩壊の危機に直面した米帝が、世界戦略の再編の下に、「アジャはアジア人に」のスローガンをもつて沖縄をアジアの侵略反革

「完春」強要する

「本土」一体化政策

開催間近にせまつた沖縄海洋博の宣伝「観客」動員策動が、「本土」では声高に呼ばれている。中でも週刊誌・テレビでは海洋博ラッシュである。それらのほとんどが、海洋博買春と結びつけ、沖縄の女性への悪質な差別を煽つてこっていることを、我々は怒りをもつて糾弾せねばならない。

「夜の海洋博を迎えて討つ」春記事では、「沖縄の女性はセックスに関する話題」とい、六月P.M.では「沖縄に買春に行こう」と言い放っているのである。

我々は、このようなブルジョア・マスコミによる女性差別が、他ならぬ日帝の沖縄人民への差別分断攻撃

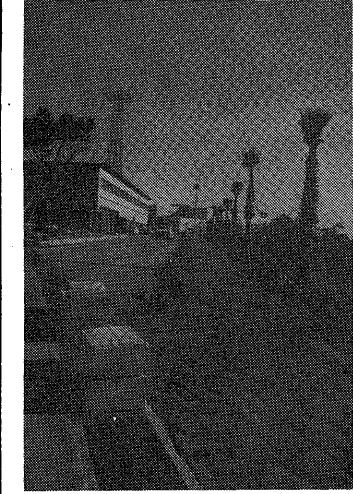
買春観光糾弾の

炎を燃え上らせよ

三月二三日、東京において「沖縄女性問題シンポジウム」を組織し、沖縄人民に対する差別分断支配の最底辺を強制されてきた沖縄置かれている。更に、「遇の下で苦闘を強いられてきた在「本土」沖縄女性の差

三月二三日、東京において「沖縄女性問題シンポジウム」を組織し、沖縄人民に対する差別分断支配の最底辺を強制されてきた沖縄置かれている。更に、「遇の下で苦闘を強いられてきた在「本土」沖縄女性の差

三月二三日、東京において「沖縄女性問題シンポジウム」を組織し、沖縄人民に対する差別分断支配の最底辺を強制されてきた沖縄置かれている。更に、「遇の下で苦闘を強いられてきた在「本土」沖縄女性の差



き出しを急速に増大させる「立場」として、買春観光によってしか生存していないと共に、他方でサービス業を中心とした第三次産業への傾斜を強めるとともに、アジャ再編を支えるイデオロギー再編を、アジア人民、とりわけ韓国人民に対する排外主義のまきちらしと、してのみならず、「本土」

の機能を支えるイデオロギー再編を、アジア人民、とりわけ韓国人民に対する排外主義のまきちらしと、してのみならず、「本土」

の機能を支えるイデオロギー再編を、アジア人民、とりわけ韓国人民に対する排外主義のまきちらしと、してのみならず、「本土」

以上見てきた様に、買春に対する差別とも闘つて生きねばならなかった。そこで、「返還」以降、米兵相手の歓樂街は、「本土」観光資本によるトルコ軍政下にあって米軍基地維持のために、沖縄女性に公

以上見てきた様に、買春に対する差別とも闘つて生きねばならなかった。そこで、「返還」以降、米兵相手の歓樂街は、「本土」観光資本によるトルコ軍政下にあって米軍基地維持のために、沖縄女性に公

以上見てきた様に、買春に対する差別とも闘つて生きねばならなかった。そこで、「返還」以降、米兵相手の歓樂街は、「本土」観光資本によるトルコ

以上の暴行事件等の残虐さをはっきりと見据え、その上陸阻止／沖縄解放／計画が、「工業立県」、「観光

以上の暴行事件等の残虐さをはっきりと見据え、その上陸阻止／沖縄解放／計画が、「工業立県」、「観光

以上の暴行事件等の残虐さをはっきりと見据え、その上陸阻止／沖縄解放／計画が、「工業立県」、「観光

(5) 1975年7月10日

第三章 暴力支配に本質を見る永井の資本主義批判

前号では、永井の調停者ぶりを、マルクス主義とエセ・マルクス主義とを和解させようとする、反動と手を結ばせようとする姿を明らかにし、また彼らの「綱領」に対する物神崇拜と大言壯語を暴露した。それについて、今回は、彼らの資本主義批判が、いかに小ブル的な、反動的なものであること、彼らのプロ独の叫びが、実は、プロ独を否定するものであることを明らかにする。

仲村 武史



下

唯物史観・プロ独を否定する永井

この批判は、何を示しているか。永井のマルクスの資本主義批判に対する全くの無理解を示している。すなわち彼らは、マルクスの経済学批判としての資本主義批判が、「どこまでも遠くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつく」という代ものでは決してない。この代ものでは決してない」と、つまり「現実の階級闘争にたどりつく」ことはない、と。つまり「現実の階級闘争とは無縁であり、決してしまっている。既にこの叙述の仕方の中に資本主義批判と国家論を全く別系列のものとして取り扱う傾向が見られるのであって、それは榎原のいう「国家論の外在化」と同様の偏向ともものとしてある。……我々の資本主義批判にまで至らねばならないとしても、それは「価値論」批判から「蓄積論」と、「再生産論」へと、どこまで行くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつくなる。代のところは、君の好きな本源的蓄積やまでもある。またこのことは、君達の好きな本源的蓄積やまでもある。」と。

この批判は、何を示しているか。永井のマルクスの資本主義批判に対する全くの無理解を示している。すなわち彼らは、マルクスの経済学批判としての資本主義批判が、「どこまでも遠くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつく」という代ものでは決してない。この代ものでは決してない」と、つまり「現実の階級闘争にたどりつく」ことはない、と。つまり「現実の階級闘争とは無縁であり、決してしまっている。既にこの叙述の仕方の中に資本主義批判と国家論を全く別系列のものとして取り扱う傾向が見られるのであって、それは榎原のいう「国家論の外在化」と同様の偏向ともものとしてある。……我々の資本主義批判にまで至らねばならないとしても、それは「価値論」批判から「蓄積論」と、「再生産論」へと、どこまで行くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつくなる。代のところは、君の好きな本源的蓄積やまでもある。またこのことは、君達の好きな本源的蓄積やまでもある。」と。

党に訴える!」において、およそ全体の三分の一におよぶ長い(注)で、「部落論文」へ『烽火』二八一二、三号)批判を行い、同時に、彼らの資本主義批判、国家に対する立場を展開している。批判にいわく。

「『剩余価値論』と『蓄積論』への展開に求ることによつて、そもそも(上)論文三部作や、「ゴータ綱領批判」の関係の原則的に継承し」なる見地を自ら閉ざしてしまっている。既にこの叙述の仕方の中に資本主義批判と国家論を全く別系列のものとして取り扱う傾向が見られるのであって、それは榎原のいう「国家論の外在化」と同様の偏向ともものとしてある。……我々の資本主義批判にまで至らねばならないとしても、それは「価値論」批判から「蓄積論」と、「再生産論」へと、どこまで行くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつくなる。代のところは、君の好きな本源的蓄積やまでもある。またこのことは、君達の好きな本源的蓄積やまでもある。」と。

この批判は、何を示しているか。永井のマルクスの資本主義批判に対する全くの無理解を示している。すなわち彼らは、マルクスの経済学批判としての資本主義批判が、「どこまでも遠くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつく」という代ものでは決してない。この代ものでは決してない」と、つまり「現実の階級闘争にたどりつく」ことはない、と。つまり「現実の階級闘争とは無縁であり、決してしまっている。既にこの叙述の仕方の中に資本主義批判と国家論を全く別系列のものとして取り扱う傾向が見られるのであって、それは榎原のいう「国家論の外在化」と同様の偏向ともものとしてある。……我々の資本主義批判にまで至らねばならないとしても、それは「価値論」批判から「蓄積論」と、「再生産論」へと、どこまで行くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつくなる。代のところは、君の好きな本源的蓄積やまでもある。またこのことは、君達の好きな本源的蓄積やまでもある。」と。

この批判は、何を示しているか。永井のマルクスの資本主義批判に対する全くの無理解を示している。すなわち彼らは、マルクスの経済学批判としての資本主義批判が、「どこまでも遠くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつく」という代ものでは決してない。この代ものでは決してない」と、つまり「現実の階級闘争にたどりつく」ことはない、と。つまり「現実の階級闘争とは無縁であり、決してしまっている。既にこの叙述の仕方の中に資本主義批判と国家論を全く別系列のものとして取り扱う傾向が見られるのであって、それは榎原のいう「国家論の外在化」と同様の偏向ともものとしてある。……我々の資本主義批判にまで至らねばならないとしても、それは「価値論」批判から「蓄積論」と、「再生産論」へと、どこまで行くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつくなる。代のところは、君の好きな本源的蓄積やまでもある。またこのことは、君達の好きな本源的蓄積やまでもある。」と。

この批判は、何を示しているか。永井のマルクスの資本主義批判に対する全くの無理解を示している。すなわち彼らは、マルクスの経済学批判としての資本主義批判が、「どこまでも遠くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつく」という代ものでは決してない。この代ものでは決してない」と、つまり「現実の階級闘争にたどりつく」ことはない、と。つまり「現実の階級闘争とは無縁であり、決してしまっている。既にこの叙述の仕方の中に資本主義批判と国家論を全く別系列のものとして取り扱う傾向が見られるのであって、それは榎原のいう「国家論の外在化」と同様の偏向ともものとしてある。……我々の資本主義批判にまで至らねばならないとしても、それは「価値論」批判から「蓄積論」と、「再生産論」へと、どこまで行くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつくなる。代のところは、君の好きな本源的蓄積やまでもある。またこのことは、君達の好きな本源的蓄積やまでもある。」と。

第四章 プロ独を否定する永井

この批判は、何を示しているか。永井のマルクスの資本主義批判に対する全くの無理解を示している。すなわち彼らは、マルクスの経済学批判としての資本主義批判が、「どこまでも遠くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつく」という代ものでは決してない。この代ものでは決してない」と、つまり「現実の階級闘争にたどりつく」ことはない、と。つまり「現実の階級闘争とは無縁であり、決してしまっている。既にこの叙述の仕方の中に資本主義批判と国家論を全く別系列のものとして取り扱う傾向が見られるのであって、それは榎原のいう「国家論の外在化」と同様の偏向ともものとしてある。……我々の資本主義批判にまで至らねばならないとしても、それは「価値論」批判から「蓄積論」と、「再生産論」へと、どこまで行くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつくなる。代のところは、君の好きな本源的蓄積やまでもある。またこのことは、君達の好きな本源的蓄積やまでもある。」と。

この批判は、何を示しているか。永井のマルクスの資本主義批判に対する全くの無理解を示している。すなわち彼らは、マルクスの経済学批判としての資本主義批判が、「どこまでも遠くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつく」という代ものでは決してない。この代ものでは決してない」と、つまり「現実の階級闘争にたどりつく」ことはない、と。つまり「現実の階級闘争とは無縁であり、決してしまっている。既にこの叙述の仕方の中に資本主義批判と国家論を全く別系列のものとして取り扱う傾向が見られるのであって、それは榎原のいう「国家論の外在化」と同様の偏向ともものとしてある。……我々の資本主義批判にまで至らねばならないとしても、それは「価値論」批判から「蓄積論」と、「再生産論」へと、どこまで行くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつくなる。代のところは、君の好きな本源的蓄積やまでもある。またこのことは、君達の好きな本源的蓄積やまでもある。」と。

この批判は、何を示しているか。永井のマルクスの資本主義批判に対する全くの無理解を示している。すなわち彼らは、マルクスの経済学批判としての資本主義批判が、「どこまでも遠くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつく」という代ものでは決してない。この代ものでは決してない」と、つまり「現実の階級闘争にたどりつく」ことはない、と。つまり「現実の階級闘争とは無縁であり、決してしまっている。既にこの叙述の仕方の中に資本主義批判と国家論を全く別系列のものとして取り扱う傾向が見られるのであって、それは榎原のいう「国家論の外在化」と同様の偏向ともものとしてある。……我々の資本主義批判にまで至らねばならないとしても、それは「価値論」批判から「蓄積論」と、「再生産論」へと、どこまで行くまで行けば、やがて現実の階級闘争にたどりつくなる。代のところは、君の好きな本源的蓄積やまでもある。またこのことは、君達の好きな本源的蓄積やまでもある。」と。

6・23闘争

沖縄・首都・関西で決起

六・一八—二三

日の丸慰靈祭糾弾す

海洋博粉碎・上陸阻止の旗高く

人民を排外主義にかりたてる

「現代の強制連行」を許すな

沖縄 韓国人キビ労働者・パイン工・医師の導入

かつて、海洋博関連建設事業及び同関連ホテル事業への韓国労働者の「導入」の動きがあった。これは、ブルジョア法でも「復帰特別措置」の拡大解釈のみによつて、キビ・パインに韓国労働者を「導入」しておらず、対象産業が限定されてること、もう一つは労組婦人部の反対行動、大会決議等があつたことで、一応止されている。海洋博に伴う「現代の強制連行」粉碎の鬪いは、当時はこのよさである。しかし今日の段階では、沖縄への「韓国領事館」設置、沖縄と韓国の親善協会(二月設立)―元日本物右翼が中心―、思会の大物右翼が中

六・二二海洋博粉碎、皇太子沖縄上陸阻止闘争は、沖縄一首都・関西を一本の赤い糸で貫き、断固として七・一七・二〇闘争への進撃を開始した。沖縄においては、六・二月一八日、日本軍によつて三「日の丸慰靈祭」粉碎の占拠され、まさに第二の「集会とデモが沖解同(準)を軸に糸満から摩文仁ヶ丘まで、海洋博粉碎沖縄一「本土」実行委と現地共闘の握手で、五〇余の密集した強固な隊列をもつて権力・右翼天皇主義者の敵対をはねつけ闘い抜かれた。

この闘争の前段には、六・二三闘争は、天皇制の下、沖縄人民を侵略せしめたのである。た日本軍の悪虐非道に対する闘争に勤めし、大量虐殺し

六・二二海洋博粉碎、皇太子沖縄上陸阻止闘争は、沖縄一首都・関西を一本の赤い糸で貫き、断固として七・一七・二〇闘争への進撃を開始した。沖縄においては、六・二月一八日、日本軍によつて三「日の丸慰靈祭」粉碎の占拠され、まさに第二の「集会とデモが沖解同(準)を軸に糸満から摩文仁ヶ丘まで、海洋博粉碎沖縄一「本土」実行委と現地共闘の握手で、五〇余の密集した強固な隊列をもつて権力・右翼天皇主義者の敵対をはねつけ闘い抜かれた。

この闘争の前段には、六・二三闘争は、天皇制の下、沖縄人民を侵略せしめたのである。た日本軍の悪虐非道に対する闘争に勤めし、大量虐殺し

る怒りを訴える南部住民とともに聞く、更に現在のイタガ次々に闘いの決議をしていくつており、「本土」の批判・論争(「血債の思想の内実・・・戦犯天皇決死糾弾の思想的意義・・・」)が繰り広げられたのである。この闘争は、天皇制イデオロギーに対する闘いとして、文字通り、靖国化されようとしている。摩文仁ヶ丘に、皇軍II日軍に対する糾弾の闘い(この闘争での六・二三闘争は、五・一四海洋博粉碎沖縄一「本土」実行委本部現地五名の名護市内における不當逮捕、六・二二南部闘争に勤めし、大量虐殺し

る怒りを訴える南部住民とともに聞く、更に現在のイタガ次々に闘いの決議をしていくつており、「本土」の批判・論争(「血債の思想の内実・・・戦犯天皇決死糾弾の思想的意義・・・」)が繰り広げられたのである。この闘争は、天皇制イデオロギーに対する闘いとして、文字通り、靖国化されようとしている。摩文仁ヶ丘に、皇軍II日軍に対する糾弾の闘い(この闘争での六・二三闘争は、五・一四海洋博粉碎沖縄一「本土」実行委本部現地五名の名護市内における不當逮捕、六・二二南部闘争に勤めし、大量虐殺し

る怒りを訴える南部住民とともに聞く、更に現在のイタガ次々に闘いの決議をしていくつており、「本土」の批判・論争(「血債の思想の内実・・・戦犯天皇決死糾弾の思想的意義・・・」)が繰り広げられたのである。この闘争は、天皇制イデオロギーに対する闘いとして、文字通り、靖国化されようとしている。摩文仁ヶ丘に、皇軍II日軍に対する糾弾の闘い(この闘争での六・二三闘争は、五・一四海洋博粉碎沖縄一「本土」実行委本部現地五名の名護市内における不當逮捕、六・二二南部闘争に勤めし、大量虐殺し

る怒りを訴える南部住民とともに聞く、更に現在のイタガ次々に闘いの決議をしていくつており、「本土」の批判・論争(「血債の思想の内実・・・戦犯天皇決死糾弾の思想的意義・・・」)が繰り広げられたのである。この闘争は、天皇制イデオロギーに対する闘いとして、文字通り、靖国化されようとしている。摩文仁ヶ丘に、皇軍II日軍に対する糾弾の闘い(この闘争での六・二三闘争は、五・一四海洋博粉碎沖縄一「本土」実行委本部現地五名の名護市内における不當逮捕、六・二二南部闘争に勤めし、大量虐殺し

る怒りを訴える南部住民とともに聞く、更に現在のイタガ次々に闘いの決議をしていくつており、「本土」の批判・論争(「血債の思想の内実・・・戦犯天皇決死糾弾の思想的意義・・・」)が繰り広げられたのである。この闘争は、天皇制イデオロギーに対する闘いとして、文字通り、靖国化されようとしている。摩文仁ヶ丘に、皇軍II日軍に対する糾弾の闘い(この闘争での六・二三闘争は、五・一四海洋博粉碎沖縄一「本土」実行委本部現地五名の名護市内における不當逮捕、六・二二南部闘争に勤めし、大量虐殺し

る怒りを訴える南部住民とともに聞く、更に現在のイタガ次々に闘いの決議をしていくつており、「本土」の批判・論争(「血債の思想の内実・・・戦犯天皇決死糾弾の思想的意義・・・」)が繰り広げられたのである。この闘争は、天皇制イデオロギーに対する闘いとして、文字通り、靖国化されようとしている。摩文仁ヶ丘に、皇軍II日軍に対する糾弾の闘い(この闘争での六・二三闘争は、五・一四海洋博粉碎沖縄一「本土」実行委本部現地五名の名護市内における不當逮捕、六・二二南部闘争に勤めし、大量虐殺し



五号 七月十日発行
沖縄通信
四号 発売中
寄稿
五・一五闘争の地平と我々の決意
海洋博粉碎・皇太子訪沖阻止の歴史的意義
○男の税金をさしづかれて、
入管体制の下で政治的無権利におとしめられており
それが、正しく虚偽とペテンが秘んでいた
帝のカイライと化した朴政権や、日帝一右翼天皇主義
樹立をなしていく見地と、
土を貢ぬく単一のプロ独立が寄せられた。更に、全闘つていい事が決意された。

五面よりつづく
人民戦線派に対し、「暴力をかけて闘ってきたので、開始したという歴史をもつて、最も誠實に闘うべき歴史をもつて、彼らが、再び、急進民主主義、第二次世界大戦中の同志二名の逮捕等として、ブロレタリアートの闘争として、ブロレタリアートとして、单一の建説として、一切の自然発生的

れた。

これら、六・一八、六・二三闘争において、このような見地からの一切の思想的・政治的分岐をますます形成していかなければ

な諸々の闘争において、このならぬことを示している。

首都においては、午後二時清水谷公園において、沖縄現地での闘いとともに闘争の最先頭に立つて闘い抜いた。

我がボルシエビキも、沖縄現地での闘いとともに闘争の最先頭に立つて闘い抜いた。

争の最先頭に立つて闘い抜いた。

これで、六・一八、六・二三闘争宣言を始めたとして、國公勞、高教組北支部・電通青年常任委等

もって集会が克ち取られ、

海闊地約二〇〇名の結集を

時間で約二〇〇名の結集を

五面よりつづく

ントの闘いの全面的総括にとりかかったという、それ

人民戦線派に対し、「暴力をかけて闘ってきたので、開始したという歴史をもつて、最も誠實に闘うべき歴史をもつて、彼らが、再び、急進民主主義、第二次世界大戦中の同志二名の逮捕等として、ブロレタリアートの闘争として、ブロレタリアートとして、单一の建説として、一切の自然発生的

(反)権力闘争として急進化させたのである。

第二次ブントの闘いをして、第一次ブントによるモラガループの相互攻撃の一つであげていており、「本土」の批判・論争(「血債の思想の内実・・・戦犯天皇決死糾弾の思想的意義・・・」)が強められていくつており、
この闘争での六・二三闘争は、五・一四海洋博粉碎沖縄一「本土」実行委本部現地五名の名護市内における不當逮捕、六・二二南部闘争に勤めし、大量虐殺しる怒りを訴える南部住民とともに聞く、更に現在のイタガ次々に闘いの決議をしていくつており、「本土」の批判・論争(「血債の思想の内実・・・戦犯天皇決死糾弾の思想的意義・・・」)が強められていくつており、
この闘争での六・二三闘争は、五・一四海洋博粉碎沖縄一「本土」実行委本部現地五名の名護市内における不當逮捕、六・二二南部闘争に勤めし、大量虐殺しる怒りを訴える南部住民とともに聞く、更に現在のイタガ次々に闘いの決議をしていくつており、「本土」の批判・論争(「血債の思想の内実・・・戦犯天皇決死糾弾の思想的意義・・・」)が強められていくつており、
この闘争での六・二三闘争は、五・一四海洋博粉碎沖縄一「本土」実行委本部現地五名の名護市内における不當逮捕、六・二二南部闘争に勤めし、大量虐殺しる怒りを訴える南部住民とともに聞く、更に現在のイタガ次々に闘いの決議をしていくつており、「本土」の批判・論争(「血債の思想の内実・・・戦犯天皇決死糾弾の思想的意義・・・」)が強められていくつており、
この闘争での六・二三闘争は、五・一四海洋博粉碎沖縄一「本土」実行委本部現地五名の名護市内における不當逮捕、六・二二南部闘争に勤めし、大量虐殺し